

オーバードーズ：サイコ・カタストロフィー

シアタースタジオ・インドネシア

演出：ナンダン・アラデア [インドネシア]

インドネシア

演劇(野外)

世界初演

11月9日(土)～11月13日(水)

計4ステージ

池袋西口公園

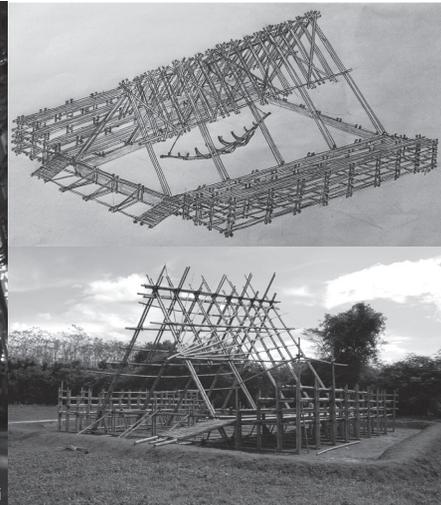
一般前売：¥3,500(当日+¥500)

自由席(整理番号付)

上演時間：60分(予定)



「バラバラな生体のバイオナレーション! ～エマージェンシー」
(F/T12公募プログラム)



上：竹の劇場イメージスケッチ
下：竹の劇場試作

/見どころ

- 1 昨年のF/Tアワード(公募プログラム最優秀賞)受賞カンパニーが、主催プログラムに初登場、F/T13のオープニングを飾る!
- 2 「海」「船」をイメージした、竹製の野外劇場が池袋西口公園に出現! 場内を縦横無尽に駆けるパフォーマンスが、客席をも揺らす!
- 3 客席の反応を逐次映像に変換して舞台面に投射。インタラクティブな空間づくりを通して、自然と人間の身体との関係を再検証する

竹を使った巨大な建造物の製作を通じて、自然と人間、技術との関係に切り込んだパフォーマンス『バラバラな生体のバイオナレーション! ～エマージェンシー』で、昨年のF/Tアワード(*)を受賞した、シアタースタジオ・インドネシア。主催プログラム初登場となる今回は、「海」や「船」をイメージした竹製の野外劇場を池袋西口公園に設置、1883年のクラカタウ山の大噴火と津波災害を題材にした新作を上演する。場内を自在に駆けるエネルギーギッシュなパフォーマンスは、客席をも揺らし、自然との格闘を体感させる。また、観客の反応を逐次映像に変換する装置も導入、舞台面には常にその映像がプロジェクションされる。畏れや祈りの感情をも引き出すこの劇場空間は、人間本来の生き方、身体のある方を再考する場ともなるはずだ。

*F/Tアワード……F/T公募プログラムの参加作品を対象に、新しい価値を創造する作品(アーティスト)を選出、次年度の主催プログラムとしての創作・発表の権利を約束する。

/ 劇評・レビュー

未開社会における創造の手続き（プリコラージュ）を野外演劇として繰り広げながら、超近代の科学技術の制御不可能性と戦うという身体的な実践を果敢にも展開しつづけるのである。あきらめない、それがこのパフォーマンスの思想的根拠でもあるのだ。だから、巨大な構築体に脅かされつつも、しかし、それを切り抜けようとする身振りが考案されつづけるのである。うまくいくかどうか、それはわからないが、いまのところ、彼ら、彼女たちはうまく切り抜けている。その時間の流れが、このパフォーマンスの持続時間であり、緊急事態はバイオナレーションによってかろうじて切り抜かれているのである。そのことが、おそらくは、インドネシアにおいても、近代性の展開過程のなかで人間が試みつづけなければならないことなのであろう。そして、そのことを実践するモデル、もしくはヴィジョンを提示するものとしてこの舞台は構想されているにちがいないのである。

鴻英良、2012年F/T公募プログラム選評

『小さな身振りか大きな身振りか？—身振りの思想性、その演劇との関係をめぐって—』より抜粋

/ プロフィール



ナンダン・アラデア Nandang Aradea ▶1971年、インドネシア西ジャワ州生まれ。インドネシアの教員養成学校を卒業後、モスクワの芸術大学で演出を学ぶ。2006年にシアタースタジオ・インドネシアを設立し、バンテン州を拠点に活動。09年にFederasi Teater Indonesiaで最優秀賞を受賞。10年、ポーランドのFETAに参加。インドネシア国内では、バンテン州知事賞を受賞。11年、ジャカルタビエンナーレに参加。12年、F/T公募プログラムに参加し『バラバラな生体のバイオナレーション！ ～エマージェンシー』でF/Tアワードを受賞。

/ 過去作品

- ▶ Perahu [船] (2006)
- ▶ Bicaralah Tanah [土地の話] (2007-2011)
- ▶ Perempuan Gerabah [陶器の女] (2008-2010)
- ▶ Bebegig [案山子] (2010)
- ▶ Bionarasi Tubuh Terbelah [バラバラな生体のバイオナレーション！] (2011)

/ クレジット

演出：ナンダン・アラデア
 舞台美術・出演：オトン・ドゥラヒム
 音響デザイン・映像オペレーター：エンリー・ジョハン・ジャオハリ
 出演：デシ・インドリアニ、マブスティ、ウセップ・メメン・スヘンダール、アデ・イイ・サリフディン、オマン・アブドゥラフマン
 照明：オマン・アブドゥラフマン
 舞台監督：ディンディン・サプルディン
 ユニットオフィサー：ファリッド・イブヌ・ワヒド
 ユニットプロダクション：ルディ・ルスタンディ

広報：ラトゥ・セルフィ・アグネシア、イスバトゥラ
 制作統括・出演：ハサスディン・バグス・バゲニ
 プロデューサー：セノ・ジョコ・スヨノ、アグス・ファイサル・カリム
 アドバイザー：ラノ・カルノ（バンテン州副知事）、H.マルワン
 顧問：ジャトニカ・ナンガミハルジャ
 後援：インドネシア共和国大使館
 製作：フェスティバルトーキョー、シアタースタジオ・インドネシア
 主催：フェスティバルトーキョー

『四谷雑談集』^{ぞうたんしゅう} + 『四家の怪談』^{よつや}

中野成樹、長島 確 [日本]

日本

演劇(ツアー形式)

世界初演

『四谷雑談集』

11月9日(土)、14日(木)、17日(日)
19日(火)、23日(土・祝) 計5ステージ
四谷~新宿エリア

上演時間: 90分(予定)

『四家の怪談』

11月10日(日)、15日(金)、16日(土)
20日(水)、24日(日) 計5ステージ
足立・葛飾エリア

上演時間: 120分(予定)

※料金、スケジュール等の詳細は、決定次第F/Tウェブサイトにて発表。



© Kazue Kawase

/見どころ

- 1 海外戯曲上演のツボを知り尽くした
中野成樹と長島確(中野成樹+フランケンズ)が、
日本の怪談の代名詞「四谷怪談」に初挑戦!
- 2 街に出て、読んで、歩いて、
想像する2つの演劇体験
- 3 写真、イラスト、建築など、
さまざまなジャンルの専門家が参加する
創作集団「つくりかたファンク・バンド」を
結成、「四谷怪談」の魅力を
多層的に描き出す

自ら「誤意識」と称する、大胆かつツボを押さえた海外戯曲の演出で、小劇場界に新風を吹き込んだ名コンビ、演出家・中野成樹とドラマトゥルクの長島確(中野成樹+フランケンズ)が、日本の怪談の代名詞「四谷怪談」に初挑戦。鶴屋南北『東海道四谷怪談』の元ネタとされる本をもとに、その舞台となった四谷~新宿エリアを巡るガイドツアー『四谷雑談集』、その現代版を足立・葛飾エリアで展開する新作民話『四家の怪談』の2本を上演する。写真、イラスト、建築などさまざまなジャンルの専門家が集う「つくりかたファンク・バンド」を新たに結成、集団創作を経て生み出される2作は、多層的なドラマ体験をもたらしてくれるだろう。

/プロフィール



中野成樹 Shigeki Nakano ▶ 1973年生まれ。演出家。中野成樹+フランケンズ主宰。有明教育芸術短期大学講師。主に海外古典戯曲をとりあげ、誤意識(誤訳+意訳)なる独自の手法で、イメージの凝り固まりつつある過去の名作を今に仕立て直す。本作では多様なメンバーとともに、つくりかたファンク・バンドとして臨む。



長島 確 Kaku Nagashima ▶ 1969年生まれ。日本におけるドラマトゥルクの草分けとして、コンセプトの立案から上演テキストの編集・翻訳・構成まで、身体や声とともにあることばを幅広く扱う。近年は『墨田区/豊島区/三宅島在住アトレウス家』『長島確のつくりかた研究所』(東京アートポイント計画)など劇場外でのアートプロジェクトも主導。

/クレジット

作: つくりかたファンク・バンド
メンバー: 中野成樹(演出)、長島 確(ドラマトゥルク)、青木正(デザイン)、
小澤英実(文筆)、大谷能生(音楽・批評)、かつしかけいた(イラスト)、
川瀬一絵(写真)、佐藤慎也(建築)、須藤崇規(映像・Web)ほか

制作: 加藤弓奈
製作・主催: フェスティバル/トーキョー

東海道四谷怪談 —通し上演—

日本

演劇

木ノ下歌舞伎

監修・補綴：木ノ下裕一 [日本]

演出：杉原邦生 [日本]

作：鶴屋南北

11月21日(木)～11月24日(日)

計4ステージ

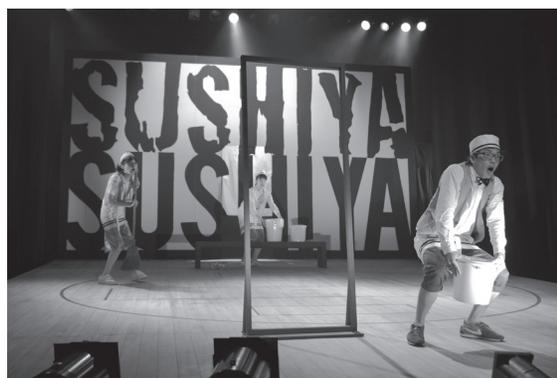
あうるすぽっと

一般前売：¥3,500(当日+¥500)、

幕見券：¥1,500(前売・当日)

※幕見券は11月1日発売予定

指定席／上演時間：6時間(休憩含む・全3幕)(予定)



京都×横浜プロジェクト2012『義経千本桜』より「鮎屋」の場面
2012年7月京都芸術劇場 春秋座
© Toshihiro Shimizu

見どころ

- 1 古典芸能への深い造詣と
現代的で自由な発想で、歌舞伎演目に
新たな息吹を与える若手企画集団、F/T初登場
- 2 鶴屋南北の大作『東海道四谷怪談』の
全幕通し上演を敢行！
総勢20名の俳優陣による「一大群像劇」が、
お岩の悲劇を生んだ社会、時代の闇を描き出す
- 3 元・天井棧敷の女優・蘭妖子、
舞台美術家・島次郎ら、現代の小劇場演劇
の枠を超えた共同作業も実現！

劇場に響き渡るテクノが祝祭性を強調する『三番叟』、3人の若手演出家による『義経千本桜』通し上演など、主宰・木ノ下裕一の古典芸能への深い造詣をベースに、現代における歌舞伎演目上演の可能性を探る木ノ下歌舞伎。京都、横浜を拠点に活動する彼らが、この秋F/Tに初登場する。同団体の企画員でもある演出家・杉原邦生が、総勢20名の俳優陣と共に挑むのは、鶴屋南北の大作『東海道四谷怪談』。現在ではカットされることの多い端役のエピソードにも光を当てた「一大群像劇」を通じ、お岩の悲劇を生み出した時代、社会の闇に迫る。さらに今回は、元・天井棧敷の女優・蘭妖子、舞台美術家・島次郎ら、ベテラン演劇人も参加、小劇場演劇の枠を超えた同時代演劇の誕生が待たれる。

プロフィール



© Ayumu Matsuura

木ノ下裕一 Yuichi Kinoshita ▶1985年和歌山市生まれ。小学校3年生の時、上方落語を聞き衝撃を受けると同時にその日から独学で落語を始め、その後、古典芸能への関心を広げつつ現代の舞台芸術を学び、古典演目上演の演出や監修を自らが行う木ノ下歌舞伎を旗揚げ。2010年度から3カ年継続プロジェクトとして「京都×横浜プロジェクト」を実施し12年7月には『義経千本桜』の通し上演を成功させるなど、意欲的に活動を展開している。F/Tには演劇大学09秋に参加。



© Takashi Horikawa

杉原邦生 Kunio Sugihara ▶1982年東京生まれ、神奈川県茅ヶ崎育ち。特定の団体に縛られず、さまざまなユニット、プロジェクトでの演出活動を行っている。木ノ下歌舞伎には2006年、『yotsuya-kaidan』での演出をきっかけに企画にも参加。これまでに『三番叟』(08年)、『勸進帳』(10年)、『義経千本桜』(12年)、『黒塚』(13年)と合わせて5作品を演出。F/Tには11年公募プログラムに参加。

クレジット

監修・補綴：木ノ下裕一

演出：杉原邦生

作：鶴屋南北

出演：亀島一徳、黒岩三佳、飯塚克之、細野今日子、田中佑弥、高橋義和、都京助、田中美希恵、森田真和、日高啓介、後藤剛範、四宮章吾／乗田夏子、高山のえみ、峯岸のり子、岩谷優志、木山廉彬、竹居正武、森一生／蘭妖子

美術：島次郎
照明：中山奈美
音響：齋藤学
衣装：藤谷香子

舞台監督：大鹿展明

補綴助手：稲垣貴俊

文芸：関亜弓

制作：本郷麻衣

助成：芸術文化振興基金

協力：オフィス・ラン、急な坂スタジオ、krei inc.、KUNIO、

劇団しようよ、劇団野の上、劇団民藝、ZACCO、

中野成樹+フランケンズ、ハイレグタワー、FAIFAI (快快)、

FUKAIPRODUCE羽衣、ロク

製作：木ノ下歌舞伎

共同製作：フェスティバルトーキョー

主催：フェスティバルトーキョー 木ノ下歌舞伎



芸術文化振興基金

東京ヘテロトピア

Port B

構成・演出：高山 明 [日本]

11月9日（土）～ 12月8日（日）

都内各所

一般前売：¥3,500（当日+¥500）

※都内各所に点在する会場を自由に巡る形式の作品です。
※ご購入のチケットは、東京芸術劇場内インフォメーションにて
ガイドブックと携帯ラジオにお引替ください。

お引替え期間：11月9日（土）～ 12月8日（日）
（休館日：11月11日（月）・12日（火）は除く）

※お引替え後は会期中、何度でも自由に会場を訪れることができます。



© Masahiro Hasunuma

/見どころ

- 1 ヨーロッパ屈指の演劇祭「ウィーン芸術週間」で、3.11後の現実に応答する二つの近作を上演、話題を集めたPort B（高山明）の最新作
- 2 アジアからの留学生たちの痕跡を歩き、聞き、「もう一つの東京」を思い描くツアー演劇
- 3 「旅」「翻訳」をめぐる創作過程での思索も「ラジオ番組」等を通じて作品の外へ発信

3.11後の現実に向き合った近作『Referendum - 国民投票プロジェクト』（F/T11）、『光のないII』（F/T12）が、ウィーン芸術週間でも上演され、話題を集めたPort B。その最新作は、アジアからの留学生たちの痕跡を歩く「旅」の演劇だ。参加者はガイドブックと携帯ラジオを手に、レストランや公園などさまざまな公共空間を思い思いに訪れる。目的の場所でラジオから聞こえてくるのは、かつてその場所に生きた人や縁のある都市、国の物語。そして観客は未知のアジア、そして「現実の中の異郷＝ヘテロトピア」としての東京に出会っていく。創作上のキーワードは「旅」と「翻訳」。物語（テキスト）は現役の留学生と管啓次郎、林立騎ら翻訳者との対話を元に生み出され、その思索の過程もオリジナルの「ラジオ番組」等を通じ、広く発信される。

/プロフィール



© Yasuyuki Emori

高山 明 Akira Takayama ▶1969年生まれ。2002年、Port Bを結成。既存の演劇の枠組を超えた社会実験的な作品を次々と発表。都市や社会に存在する記憶や風景、メディアなどを引用し再構成しながら作品化する手法で、国内外のフェスティバルや美術展で注目を集めている。『個室都市 東京』（F/T09秋）はウィーン芸術週間（11年）に招聘され、13年にも同芸術祭でウィーン版『Referendum - 国民投票プロジェクト』（F/T11）、『光のないII』（F/T12）を発表し、いずれも高い評価を得た。

/クレジット

構成・演出：高山 明
テキスト監修：管 啓次郎
リサーチ&テキスト：小野正嗣、温 又柔、林 立騎、南 映子ほか、
アジアからの留学生たち
ガイドブック編集：深澤晃平
技術：井上達夫

ラジオ協力：毛原大樹
記録写真：蓮沼昌宏
制作：田中沙季
協力：東京芸術大学・桂英史研究室、柿本ケンサク、高橋聡、望月章宏
製作：フェスティバル/トーキョー、Port B
主催：フェスティバル/トーキョー

永い遠足

サンプル

作・演出：松井 周 [日本]

日本

演劇

世界初演

11月17日(日)～11月25日(月)

計10ステージ

にしすがも創造舎

一般前売：¥3,500(当日+¥500)

自由席(整理番号付)

上演時間：100分(予定)

日本語上演、英語字幕つき(11月23日(土)、24日(日)のみ)



『女王の器』© Tsukasa Aoki

/見どころ

- 1 「アブノーマル」を捕捉する
鋭敏な感性を武器に人間の生態を描き出す個性派、松井周が
3年ぶりにF/Tで新作を上演!
- 2 器としての「私」の身体との
付き合い方は——。
生命の起源から、
高度先進医療までを視野に入れた、
サンプル流の「生き物／人間」観察記
- 3 ギリシャ悲劇「オイディプス王」を
参照しつつ、人間のあり方、
個人と社会の関係を、根源から検証し
アップデートを試みる

アパートの一室で「国家建設」を進める中年の男とその母親の共依存的な関係を描く『自慢の息子』で、第55回岸田國士戯曲賞を受賞したサンプルの松井周。国家や社会を覆う「大きな物語」から、個人の営みに立脚した「小さな物語」まで。人々の「物語」づくりへの欲望とそこで起こる葛藤をつぶさに観察してきた彼が、人類の起源と現代を生きる命をテーマにした新作を発表する。参照されるのは、親殺しや近親相姦といったタブーを通じて、個人と社会の関係を描き出したギリシャ悲劇「オイディプス王」。戯曲と俳優、美術や照明とが有機的に絡み合う独自の劇空間の中で、先進医療と生命倫理の問題をも視野に入れた、人間の出自をめぐる新たな「物語」が紡がれる。

/プロフィール



© Mika Iwamura

松井 周 Shu Matsui ▶1972年東京生まれ。96年に劇団「青年団」に俳優として入団。その後、作家・演出家としても活動を開始、2007年に劇団「サンプル」を旗揚げ、青年団から独立する。『自慢の息子』(10年)で第55回岸田國士戯曲賞を受賞。劇団としての活動の傍ら、文学座+青年団自主企画交流シリーズ第一弾『地下室』(06年/作：松井周)、第二弾『パイドラの愛』(08年/作：サラ・ケイン)、さいたまゴールド・シアター『聖地』(10年/演出：蜷川幸雄)などの外部への脚本提供や海外戯曲の演出も行う。F/Tには、09秋『あの人の世界』で参加。

/クレジット

作・演出：松井 周
出演：古屋隆太、奥田洋平(以上サンプル・青年団)、
野津あおい(サンプル)、羽場睦子、稲継美保、
坂口辰平(ハイバイ)、坂倉奈津子、久保井 研(唐組)

舞台監督：鈴木康郎、浦本佳亮、谷澤拓巳
舞台美術：杉山至+鴉屋
照明：木藤 歩
音響：牛川紀政
衣裳：小松陽佳留(une chrysantheme)
英語字幕：門田美和

演出助手：山内 晶
ドラマターグ：野村政之
WEBデザイン：斎藤 拓
宣伝写真：momoko matsumoto
フライヤーデザイン：京(kyo.designworks)
制作：三好佐智子(quinada)、雷永直子(quinada)
助成：公益財団法人セゾン文化財団
協力：レトル、青年団、ハイバイ、唐組、至福団、シバイエンジン
製作：サンプル・quinada
共同製作・主催：フェスティバルトーキョー

ラビア・ムルエ連続上演

33rpmと数秒間



© Rabih Mroué

一般前売：¥2,500 (当日+¥500)
自由席 (整理番号付) / 上演時間：60分 (予定)
英語上演、日本語字幕つき

雲に乗って



一般前売：¥2,500 (当日+¥500)
自由席 (整理番号付) / 上演時間：65分 (予定)
アラビア語上演、日本語字幕つき

ピクセル化された革命



入場無料・要WEB予約
自由席 / 上映時間：22分
英語上映、日本語字幕つき

作・演出：リナ・サーネー、
ラビア・ムルエ [レバノン]

レバノン

演劇

日本初演

11月14日 (木) ~ 11月15日 (金)

計3ステージ

東京芸術劇場 シアターイースト

舞台は自殺した革命家・アーティストの部屋。出演者はいない。ログインしたままの Facebook の画面は更新を続け、携帯電話には次々と SMS が届く。当事者はもちろん、互いの肉体も不在なまま続けられるコミュニケーションの応酬に、着地点のないアラブの「いま」が浮かび上がる。

作・演出：ラビア・ムルエ
共同演出：サルマド・ルイス
[レバノン]

レバノン

演劇

日本初演

11月16日 (土) ~ 11月17日 (日)

計2ステージ

東京芸術劇場 シアターイースト

レバノン内戦で銃撃を受けたラビア・ムルエの実弟、イエッサ。後遺症により現実とフィクションの境を認識できなくなった彼が、子供時代、家族や友達のこと……断片的な記憶をたぐり寄せ、「舞台」という虚構の場で自らの半生を語る。それは個人の物語であると同時に、歴史の渦の中で生きる「人間」の物語でもある。

監督：ラビア・ムルエ
[レバノン]

レバノン

映像

日本初上映

無料

11月14日 (木) ~ 11月17日 (日)

計10回上映

東京芸術劇場 アトリエイースト

シリア内戦中、YouTube に数多く投稿された「ダブル・シューティング」の映像。携帯電話のカメラが捉えた銃口が撮影者を撃つ、その一瞬に何が起こっていたのだろうか——。デジタル映像を解析しながら進められるレクチャーが、切り取られたイメージと現実との間の差異、ピクセル化されたスナイパーの実体、画面には映らない撮影者の死の瞬間に迫る。

アラブ世界のリアルな現状と、マスメディアやアートにおける表現の差異に着目した作品で知られるレバノン出身の鬼才、ラビア・ムルエ。世界最大規模の美術展「ドクメンタ」にも参加するなど、現代美術の文脈でも高く評価される彼の作品を3作連続で上演する。同じくレバノン出身のパートナー、リナ・サーネーとの共作『33rpmと数秒間』と、ドクメンタで発表された映像作品『ピクセル化された革命』は、いずれも俳優の登場しない作品。前者は、ある革命家・アーティストの自殺の後も続くSNSや携帯電話などのメディアを通じたコミュニケーションを無人の舞台上に描き出すもの、

後者はラビア・ムルエ自身がナビゲーターとなってシリア内戦中にネット上に投稿された「ダブルシューティング」の映像を解析しながら、スナイパーとその撮影者（被害者）の実体、銃撃の瞬間に迫るレクチャー形式の映像作品だ。また『雲に乗って』では、銃撃の後遺症で虚構と現実の境を認識できなくなったラビアの実弟・イエッサが自らの半生を語る。これらの作品で触れられた虚構と現実の重なりとズレは、「アラブの春」を経てもなお不安定に行方なく揺れ、実体を掴みきれない彼の地の状況をも浮き彫りにする。

／レコメンド

『33rpm と数秒間』

——タイトルを見て難しそうな作品ではないかと敬遠したくなる気分は分らなくはない。だが、一度本作を見始めたなら、あつというまにその世界に誰でも惹きこまれてしまうはずだ。たとえ生身の俳優が一人も登場しなくても「演劇」は成立する？——その通りだが、それではあまりに評価として消極的すぎる。むしろこう言ってみよう。人々はそこに「演劇」がまさに目の前で思考し、かつ進化しつつある姿を目の当たりにするのだ、と。そして〈進化〉するその姿の向こう側に、レバノンの〈現実〉の手触りばかりでなく、グローバル時代を生きる私たち自身の自画像をも発見するだろう。

森山直人（日本、演劇批評家）

『ピクセル化された革命』

かつてラース・フォン・トリアー監督らにより掲げられたドグマ 95 運動のマニフェストを、演出家ラビア・ムルエはその独創的発想により、シリア騒乱におけるアマチュア・ジャーナリズム映像に適應してみせる。そして、その審美性について恐ろしく才智にたけた分析を施す。この 22 分間のレクチャー・パフォーマンスの画面に挿入されるのは、無数の「ダブル・シューティング」の瞬間。ダマスカスで日常的に勃発する二重のシュート（携帯電話による撮影／マシンガンによる射殺）の一瞬が、電子空間に記録される。だが逆説的に、その映像には観客（撮影者）と俳優（殺人者）がつねに不在だ。死者の携帯画面には、オプトグラフィーのような角膜残像は記録されない。また殺人者の相貌はフォーカスするほど無数の抽象的なピクセルと化す。死は、生は、暴力は、シリアのどこに存在するのだろうか。

岩城京子（日本、パフォーマンス・アーティスト・ジャーナリスト）

／劇評・レビュー

『33rpm と数秒間』

虚構か現実か？ パフォーマンスなのか、インスタレーションなのか、演劇なのか？ 『33rpm と数秒間』は、政治やメディア社会に鋭い問いを投げかける。驚くべき、またとても興味深い作品である。いわゆる演劇好きだけでなく、幅広い人に薦めたい。Laura Plas, Les Trois Coups.com（フランス／演劇ジャーナル）

『雲に乗って』

『雲に乗って』は、情感に訴える感動的な作品であるとともに、知的な感性に満たされた完成度の高い演劇である。その物語は、極々個人的なものでありながら、非常に普遍的なものを描くことに成功している。

Jim Quilty, The Daily Star（レバノン／新聞）

/上演履歴

『33rpmと数秒間』

- ▶2012年5月 クンステン・フェスティバル (ブリュッセル、ベルギー)
- 6月 フェスティバル・デラ・コリーネ・トリネーゼ (トリノ、イタリア)
- 7月 マルタ・フェスティバル (ポズナン、ポーランド)
- 7月 アヴィニョン演劇祭 (アヴィニョン、フランス) ほか

『雲に乗って』

- ▶2013年3月 ロッテルダム市立劇場 (ロッテルダム、オランダ) ほかオランダ各都市巡演
- 5月 ホーム・ワークス6 (バイルート、レバノン)

『ピクセル化された革命』

- ▶2012年5月 ドキュメンタリー・フォーラム (ベルリン、ドイツ)
- 6月 ドクメンタ13 (カーセル、ドイツ) ほか世界各地巡演
- ▶2013年5月 ホーム・ワークス6 (バイルート、レバノン)

/プロフィール



ラビア・ムルエ Rabih Mroué ▶1967年、レバノン出身、バイルート在住。俳優、演出家、脚本家、またレバノンの季刊誌『Kalamon』や『TDR:The Drama Review』(ニューヨーク)の編集者として活動している。バイルート・アート・センター協会の設立者であり、理事を務める。現在、ベルリン自由大学、国立リサーチセンター「インターウェービング・パフォーマンス・カルチャーズ」フェロー。2010年、スポルディング・グレイ賞受賞。11年、プリンス・クラウス賞受賞。F/Tには、F/T09秋『フォト・ロマンス』で参加。



リナ・サーネー Lina Saneh ▶1966年、レバノン出身。女優、演出家、脚本家として活動する。Ashkal Alwan-Home Workspaceのカリキュラム委員会のメンバーである。2008-13年、国立ジュネーヴ・デザイン大学教授。現在、ベルリン自由大学、国立リサーチセンター「インターウェービング・パフォーマンス・カルチャーズ」フェロー。主な作品は、『リナ・サーネーボディ・パーツ・スタジオ』(07-09年、ウェブ・プロジェクト)、『誰かが言い続けなければならない』(08年、ビデオ・インスタレーション)、『フォト・ロマンス』(09年、F/T09秋主催プログラム)、『33rpmと数秒間』(12年)など。

/クレジット

『33rpmと数秒間』

作・演出：リナ・サーネー、ラビア・ムルエ
 舞台デザイン、グラフィック、アニメーション：サマル・マカロン
 技術ディレクション：サルマド・ルイス、トーマス・カッペル
 フォト・ディレクション：サルマド・ルイス
 演出補佐：ポール・カーダ
 制作：ベトラ・セルハール

『雲に乗って』

作・演出：ラビア・ムルエ
 協同演出：サルマド・ルイス
 出演：イエッサ・ムルエ
 制作補佐：ベトラ・セルハール

『ピクセル化された革命』

監督、出演：ラビア・ムルエ

主催：フェスティバルトーキョー

現在地

日本

演劇

チェルフィッチュ

作・演出：岡田利規 [日本]

11月28日(木)～12月8日(日)

計13ステージ

東京芸術劇場 シアターイースト

一般前売：¥4,000(当日+¥500)

自由席(整理番号付)

上演時間：100分

日本語上演、英語字幕つき



© Tsukasa Aoki

/見どころ

- 1 現代日本の若者の生活を巧みに切り取り、国内外で高い評価を得てきたチェルフィッチュ・岡田利規の3.11後の第一作を東京初上演!
- 2 SF的な設定、書き言葉を使った台詞など、虚構性の高い表現に挑戦、不吉な噂をめぐり逡巡する7人の女性たちの心模様を映し出す
- 3 テキスト、身体から音楽や美術、照明まで。繊細な変化を捉え、表現し続ける舞台空間

現代日本の若者の心理を、鋭敏かつ繊細な言語、身体感覚を持って切り取ってきたチェルフィッチュの岡田利規。昨年はドイツの劇場・HAUの企画で、廃墟となった原子力発電所を描くガイドツアー形式の作品を発表するなど、国際的にも注目を集める岡田の、3.11後の第一作となった作品を東京初上演する。ある日突然出現した青い雲をめぐる噂がはじまり始めた不吉な噂。信じるか信じないか、逃げるのか留まるのか、あるいは……。変化を前に逡巡する7人の女性たちの心模様は、不穏な空気を細やかに表現する音楽や照明とも相まって、私たちの生きる現実を改めて振り返らせる。SF的な設定、女性のみ出演者、書き言葉を使った台詞など、チェルフィッチュの新境地ともなった本作。初演から1年半の時を経た「現在地」は、私たちの「現在」にどのように響くだろう。

/プロフィール



岡田利規 Toshiki Okada ▶1973年 横浜生まれ。演劇作家、小説家、チェルフィッチュ主宰。活動は従来の演劇の概念を覆すとみなされ国内外で注目される。2005年『三月の5日間』で第49回岸田國士戯曲賞を受賞。07年デビュー小説集『わたしたちに許された特別な時間の終わり』を新潮社より発表し、第2回大江健三郎賞を受賞。13年には「遡行 変形していくための演劇論」を河出書房新社より刊行。

/上演履歴

『現在地』

- ▶2012年 4月 KAAT神奈川芸術劇場(横浜)
- 5月 イムズホール/福岡演劇フェスティバル(福岡)
- 7月 Baltoscandal2012(ラクヴェレ/エストニア)
- 10月 Kampnagel(ハンブルグ/ドイツ)
- 10月 PACT Zollverein(エッセン/ドイツ)
- ▶2013年 3月 Doosan Art Center(ソウル/韓国)

/クレジット

作・演出：岡田利規
 出演：佐々木幸子、伊東沙保、南波 圭、安藤真理、青柳いづみ、
 上村 梓、石橋志保
 美術：二村周作
 音楽：サンガツ
 舞台監督：鈴木康郎
 音響：牛川紀政
 照明：大平智己

映像：山田晋平
 宣伝美術：松本弦人
 制作：precog
 共同製作：Doosan Art Center
 協力：急な坂スタジオ

製作：KAAT
 主催：フェスティバルトーキョー

F/T13イエリネク連続上演

日本

美術

演劇

日本初演

新作

光のない。(プロローグ?)

作：エルフリーデ・イエリネク [オーストリア]

演出・美術：小沢 剛 [日本]

11月21日(木)～11月24日(日)

東京芸術劇場 シアターイースト

※料金、上演時間等の詳細は、決定次第F/Tウェブサイトにて発表。

/見どころ

- 1 ノーベル賞作家エルフリーデ・イエリネクが3.11後の現実への応答として書いた『光のない。』シリーズの最新作を、昨年に続き上演!
- 2 現代美術家・小沢剛による、さまざまなメディア、視点を通してイエリネクを観る「展覧会」
- 3 客席、舞台から、バックステージまで。美術家が構成する「劇場」体験が、イエリネクの投げかける「演劇」への問いに呼応する。



『帰って来たDr.N』 © The Japan Foundation / photo: Keizo Kioku

昨年のF/Tでも相次いで上演され、3.11後の世界に向き合う問題作として、大きな反響を呼んだ、エルフリーデ・イエリネクの『光のない。』シリーズ。その最新作『光のない。(プロローグ?)』の演出に、高い問題意識をキャッチな手つきで料理する現代美術家の小沢剛が挑む。イエリネクのテキストから出発し、絵画、映像、インスタレーション……と展開していく「展覧会」は、現実を語り、記録すること、その試み自体を多角的に検証するもの。さらに、バックステージを含めた劇場全体を使ったプロジェクトは、現実に応答する「演劇」のあり方を、深部から見直す契機ともなるはずだ。

/プロフィール



小沢 剛 Tsuyoshi Ozawa ▶1965年東京生まれ。東京芸術大学在学中から風景の中に自作の地蔵を建立し、写真に収める《地蔵建立》を、93年から牛乳箱を用いた超小型移動式ギャラリー《なすび画廊》や《相談芸術》を開始。99年には日本美術史の名作を醤油でリメイクした《醤油画資料館》を、2001年より女性が野菜で出来た武器を持つポートレート写真シリーズ《ベジタブル・ウェポン》を制作している。04年に「同時に答えろYesとNo!」(森美術館)、09年に「透明ランナーは走りつづける」(広島市現代美術館)を開催。

/クレジット

作：エルフリーデ・イエリネク
 翻訳：林立騎
 演出・美術：小沢 剛

音楽監督：安野太郎
 照明：高田政義 (RYU)
 技術監督：寅川英司+鴉屋
 舞台監督：渡辺景介

製作・主催：フェスティバルトーキョー

F/T13イエリネク連続上演

日本

演劇

新作

光のない。(プロローグ?)

作：エルフリーデ・イエリネク

[オーストリア]

演出：宮沢章夫 [日本]

11月30日(土)～12月8日(日)

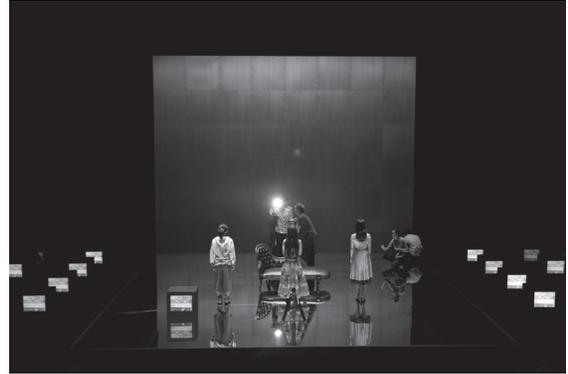
計10ステージ

東京芸術劇場 シアターウエスト

一般前売：¥4,000(当日+¥500)

自由席(整理番号付)

上演時間：120分(予定)



遊園地再生事業団「ジャパニーズ・スリーピング／世界でいちばん眠い場所」
© Nobuhiko Hikiji

/見どころ

- 1 ノーベル賞作家、エルフリーデ・イエリネクが3.11後の現実への応答として書いた『光のない。』シリーズの最新作に、現代都市と演劇の関係を探究する演出家・宮沢章夫が挑む
- 2 能の形式を媒介に「起こってしまったこと」(過去)と「それを語ること」(現在)の関係を思考する場が立ち上がる
- 3 70年代後期から現在まで、日本の小劇場演劇を代表する20～50代の5人の女優が出演

昨年のF/Tでも連続上演され、3.11以後の現実に向き合う問題作として大きな反響を呼んだ、ノーベル賞作家エルフリーデ・イエリネクの『光のない。』シリーズ。その最新作『光のない。(プロローグ?)』の演出に、遊園地再生事業団の宮沢章夫が取り組む。近年は主に現代都市と言語、身体の関係に取り組んできた宮沢が構想するのは、能の形式を媒介に、「起こったこと」(過去)と「それを語ること」(現在)の関係を検証する場をつくること。劇作・演出家、太田省吾との共同作業でも知られる安藤朋子、谷川清美をはじめ、70年代後期以後の日本の小劇場演劇を支える5人の女優の身体、語りに、現実とその表現をめぐるイエリネクの問いが映し出される。

/プロフィール



© Nobuhiko Hikiji

宮沢章夫 Akio Miyazawa ▶1956年静岡県生まれ。90年「遊園地再生事業団」の活動を開始、『ヒネミ』(92年)で第37回岸田國士戯曲賞受賞。『トータル・リビング 1986-2011』でF/T11に参加。その他、小説、評論などの執筆など活動は多岐にわたる。著作に、『14歳の国』(白水社)、『「80年代地下文化論」講義』(白夜書房)など。10年『時間のかかる読書—横光利一『機械』を巡る素晴らしきぐずぐず』で第21回伊藤整文学賞評論部門受賞。最新作は『ボブ・ディラン・グレート・ヒット第三集』(新潮社)。

/クレジット

作：エルフリーデ・イエリネク
 翻訳：林立騎
 演出：宮沢章夫

出演：安藤朋子、谷川清美、松村翔子、牛尾千聖、大場みなみ

美術：宮沢章夫
 照明：木藤 歩

音響：星野大輔(有限会社サウンドウィーズ)
 舞台監督：田中 翼
 演出助手：上村 聡
 制作：金長隆子
 協力：ARICA、演劇集団円

制作協力：遊園地再生事業団、ルアブル
 製作・主催：フェスティバルトーキョー

100% トーキョー

ドイツ

演劇

東京版初演

リミニ・プロトコル

作・構成：リミニ・プロトコル（ヘルガルド・ハウグ、
シュテファン・ケーギ、ダニエル・ヴェッツェル） [ドイツ]

演出：ダニエル・ヴェッツェル [ドイツ]

11月29日（金）～ 12月1日（日）

計3ステージ

東京芸術劇場 プレイハウス

一般前売：¥4,500（当日+¥500）

指定席

上演時間：90分（予定）

日本語上演



© Sandra Then

/見どころ

- ① 丁寧なリサーチをもとに、
日常の風景から未知の社会、個人の姿を
軽やかに切り出す、
気鋭のアート・プロジェクト・ユニットが
4年ぶりに東京での創作に挑む！
- ② 年齢、性別、居住地など、
東京の人口構成に基づいて集められた
100人の出演者による
Yes/No アンケート演劇
- ③ 出演者は原則24時間以内に
リレー（紹介）形式で選定。
8月2日現在、11人が決定。
- ④ 舞台上に現れる「生きた統計」
「動く意識調査」が、東京の現在と
そこに生きる人々の多様性を
浮き彫りにする

大学教授、投資家など、マルクス「資本論」との個人的
関係を語る人々の姿を通じ、改めてその大著の存在感を
実感させた『カール・マルクス：資本論、第一巻』（F/T09
春）、荷物に見立てた観客をトラックで輸送しグローバリズ
ムの功罪に言及するツアーパフォーマンス『Cargo Tokyo-
Yokohama』（F/T09秋）など、ドキュメンタリー的手法を用
い、現代社会と、そこに生きる個人の姿を鮮やかに切り出
すリミニ・プロトコル。4年ぶりの東京でのクリエーションと
なる本作は、東京の人口統計に基づいて集められた100人
の市民への生「Yes/Noアンケート」を主軸とする作品だ。
質問に従って舞台上を移動し、時に自らの経験や主張をマ
イクの前に語る人々……その眺めは、私たちの暮らす東京
の「縮図」であり、また未知の他者の存在を強く意識させる
ものともなるだろう。

/ 劇評・レビュー

ライブの統計——普段は、色とりどりのカーヴや棒、グラフィックやダイアグラムといった形で、パーソナルでない結果になる統計が、ここでは、表情を獲得する。

「ヴェルト (世界)」、2011年『100%ケルン』評

感銘を受けた。リミニ・プロトコルは都市の脈拍を感じ取る。言葉の力豊かに、人々を舞台へ上らせる。

「ライニッシェ・ポスト」、2011年『100%ケルン』評

約90分で、この作品は親密さを、また100人の見知らぬ人々に対する、最高の理解を生み出した。

「オージーシアター」、2012年『100%メルボルン』評

数学の分野を劇にできるのか？ 劇場で人口学の授業ができるのか？ そして、両方を愉快な一晩へと組み合わせられるのか？ 答えはイエスだ。

「ノイエ・ツェーリヒャー・ツァイトウング」2012年『100%ツェーリヒ』評

/ プロフィール



© Iko Freese/drama-berlin.de

リミニ・プロトコル Rimini Protokoll ▶ヘルガルド・ハウグ、シュテファン・ケーギ、ダニエル・ヴェッツェルによるアートプロジェクト・ユニット (2000年結成)。公共空間でのパフォーマンスやドキュメンタリー演劇の手法を用いた型破りなプロジェクトで世界の注目を集めている。日本では、『ムネモパーク』(東京国際芸術祭2008)、『カール・マルクス：資本論、第一巻』(F/T09春)、『Cargo Tokyo-Yokohama』(F/T09秋)などを上演し、好評を博した。11年、第41回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際演劇祭にて銀獅子賞受賞。

<http://www.rimini-protokoll.de/website/en/index.php>

/ 上演履歴

100%シリーズ

- ▶2008年2月、5月『100% Berlin』 HAU1 (ベルリン、ドイツ)
- ▶2010年5月『100% Vienna』 ウィーン芸術週間 (ウィーン、オーストリア)
- ▶2011年1月『100% Vancouver』 PuSH Festival 2011 (バンクーバー、カナダ)
- ▶2011年9月～11月、12年2月、4月
『100% Karlsruhe』カールスルーエ・バーデン州立劇場 (カールスルーエ、ドイツ)
- ▶2011年11月、12年1月『100% Cologne』 ケルン・シャウシュピール劇場 (ケルン、ドイツ)
- ▶2012年5月『100% Melbourne』 メルボルン・タウン・ホール (メルボルン、オーストラリア)
- ▶2012年5月～6月『100% Braunschweig』 THEATERFORMEN2012 (ブラウンシュバイク、ドイツ)
- ▶2012年6月～7月『100% London』 LIFTフェスティバル (ロンドン、イギリス)
- ▶2012年10月『100% Zurich』 ゲスナーアレー劇場 (チューリッヒ、スイス)
- ▶2013年6月『100% Cork』 コーク・ミッドサマー・フェスティバル (コーク、アイルランド)

/ クレジット

作・構成：リミニ・プロトコル (ヘルガルド・ハウグ、シュテファン・ケーギ、ダニエル・ヴェッツェル)
演出：ダニエル・ヴェッツェル
ドラマトゥルク・共同演出：セバスチャン・ブリュンガー
舞台・照明デザイン：マーク・ユングライトマイヤー、マーシャ・マズール
映像：マーク・ユングライトマイヤー

東京公演スタッフ

ドラマトゥルク：セバスチャン・プロイ
アシエート・ドラマトゥルク：萩原ヴァレントヴィッツ健
ローカライズ設計：深沢秀一
キャスティング：石塚 俊、小野塚 央
統計アドバイザー：中村和幸
演出補：大谷賢治郎
作曲・演奏：青柳拓次ほか
サウンドデザイン：小島ケイタニラブ+権藤知彦

冊子編集：影山裕樹 (OFFICE YUKI KAGEYAMA)
冊子デザイン：中澤耕平 (ASYL)
制作アシスタント：小野塚 央
協力：東京ドイツ文化センター
後援：ドイツ連邦共和国大使館
製作：フェスティバル/トーキョー、リミニ・プロトコル
主催：フェスティバル/トーキョー



The Coming Storm—嵐が来た

フォースド・エンタテインメント

演出：ティム・エッチェルス [イギリス]

11月29日(金)～12月1日(日)

計4ステージ

にしすがも創造舎

一般前売：¥4,500 (当日+¥500)

自由席 (整理番号付)

上演時間：105分 (予定)

英語上演、日本語字幕つき

イギリス

演劇

日本初演



© Hugo Glendinning

見どころ

- 1 「物語」の可能性と限界を探る、イギリスきっての先鋭的カンパニーによる遊び心満載の実験演劇
- 2 愛や死について、あるいは洗濯物について。さまざまな物語、音楽、ダンスが入り交じり、混乱する上演。「物語」は完遂されるのか——?
- 3 野放図に続くように思えるパフォーマンスに宿るバカバカしさ、そこはかたない哀愁が、観客を舞台に惹きつける

現代における演劇、パフォーマンスの意味を問い続けてきたイギリスのパフォーマンス・グループ、フォースド・エンタテインメント。彼らがおしゃべりやジョーク、マジック、ダンスなど、さまざまな「演劇的試行」を取り込みながら作り上げた壮大な実験劇が、日本初演される。よい物語とは何か？

よい物語に必要なものとは？ 6人の男女が語る物語は、愛や死、セックスから洗濯物の話まで、珍妙なダンスやふざけた楽器演奏も挟みながら、てんでバラバラに、互いに邪魔しあいつつよどみなく続いていく。それ自体に完成は訪れない。だが、パフォーマンス全体を貫くバカバカしさとそのかたない哀愁、その魅力は、物語と観客の豊かな関係性を予感させる。

/ 劇評・レビュー

いつものフォースド・エンタテインメントらしく、今作も陽気におかしく、同時にメランコリックで、心に触れる瞬間がある。——観客が見ているのは、プロセスである。物語を語っている状況を見るのであり、語られた物語を見るのではない。ときに、それは行き過ぎるほど個人的で、ときにまるでリサイクルのようでもあり、絵葉書の思い出のようである。センセーションを求めるといえば、思慮深くなり、そして衝動的にと次々と変化する。——『The Coming Storm』において、劇団は、コスチューム、髪、そして小道具の山を探る。そして、素人くさくダンスのステップを踏み、木製でできた電気椅子まで作り出す。……すべてはフィクションのため。すべては良い物語のため。もし、もっとも観客を楽しませる語られない物語に対する賞があったならば、『The Coming Storm』は確実にそれを受ける価値があるだろう。

Nachtkritik (ドイツ／アート情報サイト)

/ プロフィール

フォースド・エンタテインメント Forced Entertainment ▶イギリス、シェフィールドを拠点に活動する男女6人(ロビン・アーサー、ティム・エッチェルス、リチャード・ロウドン、クレール・マーシャル、キャシー・ナデン、テリー・オコネル)によるパフォーマンス・グループ。1984年から、演劇、インスタレーション、デジタルメディア、フィルムの方野で活動。さまざまな演劇的実験を通して、パフォーマンスの現代的意味を探る。即興とディスカッションを通して作られた作品の数々は、徹底的に遊びを取り入れつつ、現代の観客に語りうるものを探求し続けている。現在では、英国を代表するアヴァンギャルド・シアターとして国際的に評価されている。
(<http://www.forcedentertainment.com>)



© Hugo Glendinning

ティム・エッチェルス Tim Etchells ▶1962年生まれ。84年よりフォースド・エンタテインメントの設立メンバーとして、演出を務める。パフォーマンス、ビジュアルアートと物語の間を横断しながら、上演のライブ性や、時間や場にとらわれず自由に展開するイベント性に着目した作品作りをしている。フォースド・エンタテインメントでの活動のほかにも、ソロアーティスト、作家として、幅広い分野で活躍の場を広げている。ランカスター大学パフォーマンス学教授。
(<http://www.timetchell.com>)

/ 上演履歴

『The Coming Storm—嵐が来た』

- ▶2012年 5月 世界初演、パクト・ツォルフライン(エッセン、ドイツ)
- 6月 シアターフォーメン(ブラウンシュヴァイク、ドイツ)
- 6月 ゲスナーアレー劇場(チューリッヒ、スイス)
- 6月 パタシー・アート・センター：LIFTロンドン国際演劇祭(ロンドン、イギリス)
- 7月 アヴィニョン演劇祭(アヴィニョン、フランス)
- 10月 タンツクォーター劇場(ウィーン、オーストリア)
- ▶2013年 3月 フラスカティ劇場(アムステルダム、オランダ)
- 3月 HAU劇場(ベルリン、ドイツ)
- 9月 ザグレブ演劇祭(ザグレブ、クロアチア) [予定]
- 10月 トラムウェイ劇場(グラスゴー、イギリス) [予定]
- 11月 シャッス劇場(ブレダ、オランダ) [予定]

/ クレジット

構成・作：フォースド・エンタテインメント
 出演：ロビン・アーサー、フィル・ヘイズ、リチャード・ロウドン、クレール・マーシャル、キャシー・ナデン、テリー・オコネル
 演出：ティム・エッチェルス
 デザイン：リチャード・ロウドン
 照明デザイン：ニガール・エドワード
 音響：フィル・ヘイズ、フォースド・エンタテインメント
 音響コンサルタント：ジョン・アバリー
 演出助手：ヘスター・チリングワース
 制作：ライ・レニー、ジム・ハリソン
 共同製作：パクト・ツォルフライン(エッセン)、アヴィニョン演劇祭、ゲスナーアレー劇場(チューリッヒ)、タンツクォーター劇場(ウィーン)、

レ・スベクタクル・ピボン(パリ、ボンピドゥーセンター)、フェスティバル・ドートンヌ(パリ)、LIFT(ロンドン)、パタシー・アート・センター(ロンドン)、シェフィールド・シティ・カウンシル

特別協力：ブリティッシュ・カウンシル
 主催：フェスティバル/トーキー



Supported using public funding by
ARTS COUNCIL ENGLAND



フォースド・エンタテインメントは、アーツカウンシル・イングランドより助成を受けています。

ガネーシャ VS. 第三帝国

オーストラリア

演劇

日本初演

バック・トゥ・バック・シアター

演出：ブルース・グラッドウィン [オーストラリア]

12月6日(金)～12月8日(日)

計3ステージ

東京芸術劇場 プレイハウス

一般前売：¥4,500 (当日+¥500)

指定席

上演時間：100分(予定)

英語上演、日本語字幕つき



© JEFF BUSBY

舞台写真

見どころ

- ① ナチスの第三帝国によって奪われた幸福の印「卍」を取り戻す——。インドの神ガネーシャの冒険とそれを上演する劇団内でのいざこざを描き、数々の賞を受賞、世界7カ国16都市で上演された話題作をアジア初演!
- ② 知的障がいを持つ俳優たちとの共同作業が、物語を語ることとその裏側にある現実との関係を露わにする
- ③ アジアとヨーロッパ、神話の世界と人間界を横断するイメージ豊かな空間

映像や照明を駆使したイメージ豊かな空間づくりと、「生命」や「美」をめぐるさまざまな「標準」に斬り込む哲学的な思考で知られるオーストラリアの劇団、バック・トゥ・バック・シアター。知的障がいを持つ俳優たちと共に創作を続ける彼らが、インドの神ガネーシャの冒険譚とそれを上演する劇団内でのいざこざを描き、世界各国で好評を博した話題作を、ついにアジア初演する。果たしてガネーシャは、ナチス(第三帝国)に奪われた幸福の印「卍」(スワステカ)を取り戻すことができるのか——。時空を超えたファンタジックな冒険と、演出家と俳優たちの中で起こるリアルな揉め事との対比が、時にユーモアさえ感じさせながらも、物語を語ることと、その裏側にある現実との関係に鋭く迫っていく。

/ 劇評・レビュー

観客を決して受身に落ち着かせることを許さない点で傑出した作品である。演劇の全てを知っていると思う演劇愛好家にこそ必要な目の覚めるような特効薬である。

Ben Brantley, The New York Times (アメリカ/新聞)

バック・トゥ・バック・シアターは“特別”扱いとは無縁である。いやむしろ彼らの行き過ぎる正直さは、ひいきできなくなるほどである。一方で、彼らの真の技術力を見せ付ける息を呑むような美しい瞬間も彼らの作品の特長である。[中略]私は今までこのような作品を観たことがない。まさに、バック・トゥ・バック・シアターだけが作れる作品である。私たちにあって、彼らは最も重要なインディペンデント・シアターカンパニーの一つである。 Alison Croggon, Theatrenotes (オーストラリア/演劇批評サイト)

/ プロフィール

バック・トゥ・バック・シアター Back to Back Theatre ▶オーストラリア、ジーロングで知的障がいとみなされる人たちの演劇創作を目的に1987年に設立された。5名の俳優たちからなるアンサンブルとのフルタイムのコラボレーションにより独特の芸術スタイルを育んできた。彼らは完璧さや外見の美しさを追い求める文化において、完全なアウトサイダーである。こうした周辺的な立場にある彼らはユニークで、時に破壊的な世界観をもつ。そこから作り出される物語は現代の冷たく、暗い側面を大胆に探求するものだ。



© JEFF BUSBY

ブルース・グラッドウィン Bruce Gladwin ▶演出家、デザイナー、作家として実験的な演劇製作に携わる。1998年、アリーナ・シアター・カンパニーとの協同作品『人類三部作』でのテクノロジーと演劇のダイナミックな融合で注目を集める。99年、同作での創造性あふれる斬新で実験的な新しい演劇言語を生み出そうとする取り組みで、アジテジ国際児童青少年演劇協会国際名誉協会賞を受賞。バック・トゥ・バック・シアターでは、『メンタル』(99年)、『ドッグ・ファーム』(2000年)、『ソフト』(02年)、『スモール・メタル・オブジェクト』(05年)、『フード・コート』(08年)、『ガネーシャ VS. 第三帝国』(11年)を製作。

/ 上演履歴

『ガネーシャ VS. 第三帝国』

- ▶2012年 2月 オーストラリア舞台芸術見本市(アデレード、オーストラリア)
- 5月 ウィーン芸術週間(ウィーン、オーストリア)
- 6月 LIFTロンドン国際演劇祭(ロンドン、イギリス)
- 9月 ロッテルダム市立劇場(ロッテルダム、オランダ)
- ▶2013年 1月 アンダー・ザ・ラダー・フェスティバル(ニューヨーク、アメリカ)
- 2月-3月 ジーロング・パフォーミングアーツ・センター(ジーロング、オーストラリア)
- 4月 ル・マリオン、テアトル・デ・ストラズブール(ストラズブール、フランス)
- 4月 HAU劇場(ベルリン、ドイツ)
- 5月-6月 フェスティバル・トランスアメリク(モントリオール、カナダ) ほか

/ 関連プログラム

F/T×東京芸術劇場ユース・プログラムとして、バック・トゥ・バック・シアターによるワークショップ、シンポジウムを12月10日(火)、11日(水)に開催します。詳細は、F/Tウェブサイトにて発表します。

/ クレジット

演出：ブルース・グラッドウィン
 出演：マーク・ディーンズ、サイモン・ラフティ、スコット・ブライス、
 ブライアン・テリリー、ディビット・ウッズ
 協同創作：ブルース・グラッドウィン、マーク・ディーンズ、
 マルシア・ファーガソン、ニック・ホランド、サイモン・ラフティ、
 サラ・メインワリング、スコット・ブライス、ケイト・スーラン、ブライアン・テリリー、
 ディビット・ウッズ
 照明デザイン：アンドリュー・リビングストーン
 舞台美術：マーク・カフバートン
 デザイン&アニメーション：リアン・ヒンキリー
 作曲家：ヨハン・ヨハンソン

衣裳：大谷 汐
 協力：オーストラリア・アーツ・カウンシル、アーツ・ヴィクトリア、
 メルボルン・フェスティバル、マルトハウス劇場、メルボルン市、
 シドニー・メイヤー・ファンド、キール財団、
 キット・ダントン・フェローシップ2009、
 ナショナル・シアター・スタジオ(ロンドン)、
 ジーロング・パフォーミングアーツ・センター、ドイツ文化センター
 助成：豪日交流基金
 後援：オーストラリア大使館
 主催：フェスティバル・トーキョー



フェスティバル/トーキョー13における「ガネーシャ VS. 第三帝国」東京公演は、外務貿易省の一部である豪日交流基金を通じてオーストラリア連邦政府の助成を受けています。

石のような水

作：松田正隆 [日本]

演出・美術：松本雄吉 [日本]

日本

演劇

新作

12月5日(木)～12月8日(日)

計6ステージ

にしすがも創造舎

一般前売：¥4,500(当日+¥500)

自由席(整理番号付)

上演時間：120分(予定)

/見どころ

- 1 タルコフスキーの映画『ストーカー』(1979年)等を下敷きに、松田正隆が書き下ろすSFメロドラマ
- 2 数々の野外劇を手がける松本雄吉(維新派)が、劇場空間に立ち上げる「終わり」のあとの風景
- 3 立ち入り禁止区域「ゾーン」をめぐる人間模様。不穏な静けさの中で呼び起こされる「記憶」が、人々の「現在」を浮かび上がらせる



© Yuya Tsukahara

悲劇を知る都市の記憶と取材者自身の体験とを交叉させる『ヒロシマーナガサキ』シリーズ、物語の断片を街なかで散発的に上演する『マレビト・ライブ』など、先鋭的な試みが続けるマレビトの会の松田正隆が、タルコフスキーの映画『ストーカー』等を下敷きにした「メロドラマ」の執筆に取り組む。演出は、数々の野外劇を通じて未知の風景を出現させてきた維新派の松本雄吉。「演劇」「劇場」のあり方をラジカルに問い直す二人が、今、敢えて劇場空間で展開する物語演劇に向き合う。決定的(と思われた)破局の後の世界。立ち入り禁止区域「ゾーン」への案内人とその家族、死者と再会するためそこを訪れる人々が織りなす人間模様が、不穏で不安定な都市の日常を浮かび上がらせる――。

/プロフィール



© Clippin JAM

松本雄吉 Yuichi Matsumoto ▶1946年熊本県天草生まれ。大阪教育大学で美術を専攻。70年維新派を結成。74年以降の全ての作品で脚本・演出・構成を手がけ、独自のスタイル「チャンチャン☆オペラ」を確立。野外にこだわり、奈良・室生、岡山・犬島などで公演を行う。2002年朝日舞台芸術賞、05年読売演劇大賞優秀演出家賞、09年朝日舞台芸術賞・アーティスト賞、芸術選奨文部科学大臣賞、11年紫綬褒章受章。F/Tには、09秋『ろじ式』、11年『風景画―東京・池袋』で参加。



松田正隆 Masataka Matsuda ▶1962年長崎県生まれ。97年まで劇団「時空劇場」代表。96年『海と日傘』で第40回岸田國士戯曲賞、98年『月の岬』で読売演劇大賞作品賞、98年『夏の砂の上』で読売文学賞、2001年に京都府文化奨励賞受賞。戯曲の他映画の脚本・原作も手がける。03年「マレビトの会」を結成。主な作品に『島式振動器官』『声紋都市―父への手紙』(F/T09秋)『PARK CITY』『HIROSHIMA-HAPCHEON：二つの都市をめぐる展覧会』(F/T10)『アンティゴネーへの旅の記録とその上演』(F/T12)がある。立教大学現代心理学部映像身体学科教授。

/クレジット

作：松田正隆
演出・美術：松本雄吉

参照作品：『ストーカー』、『惑星ソラリス』等(いずれもアンドレイ・タルコフスキーの映画作品)

出演：山中 崇、占部房子、武田 暁、
小坂浩之、酒井和哉、筒井 潤、西山真来、幅司健太、
増田美佳、森 正史、山口恵子、和田華子

照明：吉本有輝子
音響・音楽：荒木優光、佐藤武紀
衣装：清川教子
舞台監督：大田和司

舞台監督助手：浜村修司
美術制作：柴田隆弘
宣伝美術：塚原悠也(contact Gonzo)
デザイン協力：西村
空撮協力：小川航空
制作：川原美保
制作・広報：土屋和歌子
制作助手：山崎佳奈子
企画立案：松田正隆、森山直人(京都造形芸術大学 舞台芸術研究センター)
制作協力：維新派、マレビトの会、torindo、丸井重樹
製作：京都造形芸術大学 舞台芸術研究センター
共同製作・主催：フェスティバル/トーキョー
京都芸術センター制作支援事業

F/Tシンポジウム

シンポジウム

第一線のアーティストやディレクター、評論家を迎え、F/Tの上演作品や海外での事例を手がかりとしながら、理論と実践を横断し、演劇と社会との接続を考える。

※日時、会場など詳細は、決定次第F/Tウェブサイトにて発表。

